

受験番号

広島市立看護専門学校 第一看護学科

令和三年度推薦入学試験問題

「国語」

【試験上の注意：答えはすべて解答用紙に記入すること】

一 次の文章を読んであとの問いに答えよ。

おおよそ世の中の人間の性向は、マップラバーとマップヘイターに二分類することができる。夫婦のうち一人が前者で、他方が後者である場合、ドライブなどに行こうものならたちまち（a）険悪な雰囲気となる。「ちゃんと地図を見る」「見てるわよ」「曲がるならもっと早く言え」「だって近づかないとわからないもん」という具合に。

マップラバー（map lover）はその名のとおりに、地図が大好き。百貨店に行けばまず売り場案内板に直行する。自分の位置と目的の店の位置を定めないと行動が始まらない。マップラバーは起点、終点、上流、下流、東西南北をこよなく愛する。だから、「現在地」の赤丸表示が消えてなどいようなものなら（皆がさわるのでしばしばこういうことがある）、もうそれだけでイライラする。

対する、マップヘイター（map hater）。自分の行きたいところに行くのに地図や案内板など全くたよりにしない。A 地図など面倒くさいものは見ない。百貨店に入ると勘だけでやみくもに歩き出し、それでいてちゃんと目的場所を見つけられる。二度目なら確実に最短距離でI できる。だって、アンティークショップの角を曲がって、メガネ屋さんを過ぎた左側って、前に行ったとおりのもの。（ちなみに、この会話は純粹に例示的なものであり、男と女の性向の差を（b）示唆する意図は全くありません。念のため。）

マップラバーは（c）鳥瞰的に世界を知ることが好きなのだ。やっぱりそのほうが安心できる。マップヘイターは世界の全体像なんか全然知らない。私と前後左右。自分とのII だけで十分やっていく。だって、そのほうが簡単じゃない。

一見、マップラバーのほうが理知的で、かつこよく見えませんか？ B 、実は、マップラバーこそが、方向オンチで、道に迷いやすい。山で遭難するとしたりまずマップラバーのほう。地図上で自分の位置が定位できないともう生きていけない。どちらへ歩き出しているか（d）皆目わからなくなってしまう。

マップラバーとマップヘイターのありようを考えると、彼ら彼女ら（順不同）がジグソーパズルをどのように作るか想像してみるといい。（E）ラバーとヘイターが選んでいる行動原理がよくわかる。

箱の表面に印刷してある完成図の絵柄をよく見て、夕日の部分のオレンジ色のピースを集める、船の絵柄と思われる赤や白の細かな絵柄を集める、枠を構成するはずの、縁に直線構造を持つものを別に拾

い出す。このような行動原理は基本的にマップラバーのものである。鳥瞰的な全体像と **III** な現場を
行き来しながら、世界を構築していこうとする。

C マップヘイターならどのようにジグソーパズルを作るだろうか。もちろんこれは思考実験なので、実際、そのようにパズルを作る人が存在するかどうかはまた別問題である。さて、マップヘイターにとって完成図は必要ない。マップヘイターは、ピースをひとつ選び出すと、やみくもに他のピースの山から、最初に選んだピースと合致するピースを探し出すことに **IV** する。そしてピースのまわりを囲む八つのピースを見つけ出す(ピースが外枠に接している場合は五つ、角に位置する場合は二つ)。それができると次のピースについて同じことを行う。

これは一見、(2)とても能率が悪い作業のようにつる。しかし必ずしもそうとはいえない。まず行動のルールが **V** である。自分の形と合致するかしないか。しなければ次の試行にうつる。

そしてもう一つ重要なことは、作業に、全体と部分という関係性が必要ないことである。個々のピースは、自分が全体のどの部分に定位しているかを知る必要がない。自分の背に描かれている図柄さえ知らなくてよいし、自分が夕日の一部か船の一部かは全く関知なくいい。つまりマップピングの必要がない。それゆえに、各ピースは、自分とごく近い周囲との関係性だけを手がかりに、世界全体を

a していけることになる。そこに分散的なふるまいの契機がある。

今、数千ピースからなるジグソーパズルを作ろうとすると、百人からなるマップラバーチームと同数からなるマップヘイターチームが、それぞれ一セットずつパズルを与えられて競争したとしよう。おそらくマップラバーチームは、誰が何をするか決めるだけで大変な騒ぎになるだろう。

しかしマップヘイターチームはすぐに作業に着手でき、あとはただ黙々とそれを進めればよい。自分のピースと形が合えば手元でそれをはめこみ、合わなければ真ん中の山に投げ返す。最初はなかなか進展しないようでも、徐々に山は減っていき、手元の図形は広がっていく。山が消えたあとは、マップヘイター同士が、フォークダンスのように入れ替わりながら図形を持ち寄って、相互の(3)相補性を探していけば、やがて全体はつながり合うことだろう。このときでさえマップヘイターは、パズル全体の絵柄を知る必要はない。

D、マップヘイターが採用しているこの **VI** な行動原理は、全体像をあらかじめ知った上でないと自分を定位できず行動もできないマップラバーのそれに比べて、生物学的に見てとても重要な原理なのである。そして、私たちの身体が六十兆個の細胞からなっていることを考えるとき、それぞれの細胞が行っているふるまい方はまさにこういうことなのである。鳥瞰的な全体像を知るマップラバーはどこにもいない。細胞はそれぞれ究極の **B** なのだ。

でも、読者の中にはこう思う方もいるかもしれない。それぞれの細胞はちゃんとDNAという設計図をもっているはず。どの細胞も同じDNAを持ち、それは全体像を示すマップではないのか、と。

否。DNAは全体像を示すマップではない。実行命令が書かれたプログラムでもない。せいぜいカタログがいいところだ。

すべての細胞はたったひとつの細胞から出発する。受精卵。受精卵は細胞分裂によって二細胞となり、DNAをはじめすべての細胞内小器官がコピーされ均等に分配される。次いで、同じことが起きる。四細胞。分裂は繰り返され、細胞数は倍々に増えていく。八、十六、三十二、六十四、百二十八……。

このとき細胞は何をしているのか。(4) 彼らは互いに自分のまわりの空気を読んでいるのである。空気を読むという比喩が(e) 突飛すぎるのであれば、交信といってもよい。

細胞は細胞膜という薄いシートに包まれている。最初は滑らかだったシートの表面は細胞の分裂が進むにつれ、徐々に荒れてくる。微小な凹凸が生じてくるのだ。ちょうどジグソーパズルのピースのように。その詳細はなお明らかではない。しかし非常に単純化していえば、およそ次のようなことが生じることがわかっている。

おそらく受精卵が細胞数にして数十から数百になる頃、それは分裂回数にしてほんの数回分の期間だが、そのクリティカルなタイミングに、ある細胞がその表面に、たまたま他の細胞にわずかだけ率先して、特別な形の突起を提示する。するとそれに呼応して隣接した細胞はその突起の形に相補的な形の陥没を提示し、両者は相補的に結合する。突起や陥没はタンパク質でできた細胞膜上の小さな分子である。それらが結合したとき双方の細胞に交信がなされる。それは次のような会話である。

「君が皮膚の細胞になるのなら、僕は内臓の細胞になるよ」

「君が内臓の細胞になるのなら、僕は皮膚の細胞になるよ」

細胞表面の突起物と陥没物とのあいだの相補的な結合は、互いに他を規定するように、つまり排他的に働く。無個性だった細胞群の中に、このとき初めて差異の契機が生まれる。

(出典：福岡伸一『世界は分けてもわからない』講談社現代新書・二〇〇九 作題のため省略した箇所がある)

問一 波線部 (a) ~ (e) の語の読みを記せ。

問二 空欄 A ~ D を補うのに最も適当な語を、次の (ア) ~ (オ) の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

(ア) しかし (イ) 実は (ウ) 一方 (エ) かえって (オ) むしろ

問三 空欄 I ~ VI に入れるのに最も適当な語を、次の (ア) ~ (エ) の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

空欄 I	(ア) 解決	(イ) 直行	(ウ) 確定	(エ) 帰着
空欄 II	(ア) 関係性	(イ) 地図	(ウ) 世界	(エ) 距離
空欄 III	(ア) 定位的	(イ) 直感的	(ウ) 分野的	(エ) 局所的
空欄 IV	(ア) 同化	(イ) 補正	(ウ) 専念	(エ) 順応
空欄 V	(ア) 単純	(イ) 論理的	(ウ) 端的	(エ) 鮮明
空欄 VI	(ア) 拡張的	(イ) 分離的	(ウ) 分散的	(エ) 伝播的

問四 傍線部 (1) 「ラバーとヘイターが選んでいる行動原理がよくわかる」とあるが、マップラバーとマップヘイターの行動原理について、ジグソーパズルの例を使ってそれぞれ説明せよ。

問五 傍線部 (2) 「とても能率が悪い作業のようにうつる。しかし必ずしもそうとはいえない」とあるが、なぜ「能率が悪い作業」ではないのか。簡潔に説明せよ。

問六 空欄 α ~ β に入る言葉を、それぞれ本文中から抜き出せ。

問七 傍線部 (3) 「相補」の意味として相応しいものを、次の (ア) ~ (エ) の中から一つ選んで符

号で書け。

(ア) 足りない部分に付け足すこと

(イ) 互いに仲良くして関係を保つこと

(ウ) 従属的に支えること

(エ) 互いに不足を補うこと

問八 傍線部(4)「彼らは互いに自分のまわりの空気を、読んで、いるのである」とあるが、それはどう
いうことか。簡潔に説明せよ。

二 次の文章にある傍線部のカタカナ表記を、漢字に改めよ。

馬野病院の北病棟は、広い病院の①シキチの奥に、他の新しい鉄筋の病棟からぼつんと離れた②カツ
コウで建っていた。結核患者だけを③シユウヨウする小さな二階建てのプレハブで、ぼくが入院した頃
は、二階に男の患者が四人、一階に女性患者が三人入っていたが、ほんの二ヶ月のうちに六人が退院し
て行った。ぼくと、重症患者の栗山という初老の婦人だけが残って、それきり新しい患者は入院してこ
なかつたから、ぼくは看護婦に何度も部屋を変えてくれるよう頼んだ。ぼくの部屋の真下に栗山さんの
病室があり、薄い床から立ち居振る舞いの殆どが伝わって来る。夜中にはしばしば栗山さんの咳の音で
目が醒めたりするし、ぼくはぼくで自分の足音とか、病室に置いたテレビの音量にも気を遣って、どう
にも④イゴコチが悪いのだった。⑤プアインソウな看護婦がやっと許可を与えてくれ、

「それじゃあ、尾崎さんのお好みのお部屋にお移りあそばせ」

そう大声で言い残して、外股でせかせかと太った体を運んで行ってしまおうと、ぼくはベッドから起き
あがって、歩きたびに軋むような音の響く廊下に出た。